ふるさとを大切に思う気持ちを形に

～引き継がれる郷土愛～

毎年3月に行われる「あいの土山斎王群行」、土山町の頓宮地域に約380年間続いた斎王群行に再び光を当て24年間の長きに渡り続けられた取り組みを取材しました。

天皇が即位されるたび、天皇の姫君である皇女等が京都から伊勢神宮へ奉仕のため行かれた行程で宿泊された地は「頓宮」と呼ばれていたそうです。

由緒ある名が今も残る頓宮、地域の方々や保存会により垂水頓宮跡は昭和19年に頓宮跡としては唯一の国史跡に指定された地域として全国的にも有名です。

第1回の「あいの土山斎王群行」が行われたのは24年前の平成10年、そこにはどのような思いがあったのかお話を伺いました。

第1回の開催に尽力された松山正己さん、廣沢晃さん

歴史に残るものに光を地域の個性に磨きを

「歴代の斎王さんの名前が記された額縁を見たとき、頓宮という地名への歴史探求が始まりました。

時に国が進めたふるさと創生事業、他のまちにはないことを、またみんなが楽しめるようにと、あいの土山マラソン大会、鈴鹿馬子唄全国大会などを実施し〝あいの土山〟は全国的にも有名になりました。

これからの土山をどうしていこうか考えたとき、斎王さんの歴史に光を当てました。ふるさとを大切にする心、地域を盛り上げようとする思い、子どもたちも歴史を学び、楽しんでもらおうと始めたのが『あいの土山斎王群行』です。

そこには、垂水という頓宮跡としては唯一所在が明かされ、国指定を受けた歴史ある地を私たちが大切にしないといけない、たくさんの人にも知ってもらい、みんなの手で守っていかないといけないという強い思いがありました。垂水頓宮跡は大切だということは何となく知っていても、本当の大事さをわかっている人は少なかったのではないかと思います。

始めるにあたり京都の三大まつりの一つである葵祭を参考にしました。そこで現在まで着付役を務めていただいた南登美子先生とも お出会いしました。

当然準備には資金問題がありましたが、当時の稲葉県知事に県版のふるさと創生を要望したところ、「新しい淡海文化の創造」事業に採択され、現在も使用している着物や収納庫などの整備が実現しました。

▲あいの土山斎王群行が始まるきっかけとなった歴代の斎王さんの名前が記された額縁（瀧樹神社）

斎王さんが担がれる現在の御腰輿といわれる神輿も、実際の寸法を測り、地元の職人に頼み込み、何とか制作していただきました。

また、子どもたちが群行の道中で歌う「斎王さんちゃんこ唄」も大学時代の知人に協力を依頼し完成させました。

そうした知恵や発想を、形にするために、いろいろな人の元へ直接足を運び協力を依頼したことも今では良い思い出です。

まちづくりは夢づくり、自分たちの手で開き、自分たちの手で守り続けていくために、知恵を出し、体当たりする、そんな熱い気持ちが今の時代にはもう一度大切な心ではないかと思います。

地域には隠れている歴史・文化、また人々の思いがまだまだたくさんあると思います。その宝や思いをどのように具現化するか、行事のあるなしではなく、自分の地域にあるものを大切にしようとする気持ちがこの先も長く続くことを願っています。」

▲当時のお話を伺った松山さん（左）と廣沢さん

第1回実行委員長 松岡宏さん

〝あいの土山〟を全国に

「現在の頓宮跡にある社は伊勢神宮の式年遷宮後、移設されたもので、当時は私も伊勢まで足を運んだ記憶があります。

社の整備後は、保存会もでき、地域の関心も高まっていきました。垂水頓宮という歴史深いものをみんなの手で守っていこうと地域も盛り上がる中、第1回の群行が行われました。一番心配であった天候にも恵まれ、3月とは思えない気温の中での「あいの土山斎王群行」であったことを覚えています。

現在は東海道沿いにあった松並木は残念ながら伐採されてしまいましたが、松並木の中を進む雅な群行の風景を撮影しようと県外からも多くの写真愛好者が訪れ、〝あいの土山〟を全国に知ってもらう機会につながったと思っています。」

▲24年前に思いを馳せる松岡さん